

大正時代における宮古語の民話：ニコライ・A・ネフスキー記録のI?nu panas?「エイについて」

著者	ヤロシュ アレクサンドラ
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	44
ページ	151-171
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00024290

大正時代における宮古語の民話 —ニコライ・A・ネフスキー記録の I:nu panasi 「エイについて」—

アレクサンドラ・ヤロシュ (Aleksandra Jarosz)

1. 本研究の背景

ロシア出身の東洋学者、ニコライ・A・ネフスキー (1882-1937) は日本列島の文化を民俗学的な面、かつ言語学的な面での包括的な研究により著しい成果を上げている。その多岐にわたる研究対象には宮古諸島も入っており、「宮古研究の先駆者」(かりまたしげひさ 1998) とも呼ばれることがある。

ところが、1929年に急にソ連への帰国が決定され、14年間におよび日本滞在の幕を閉じることになったネフスキーは書きかけの論文や未整理の研究ノートなど、大量の調査資料を残して日本を後にすることを余儀なくされた。

そうした調査資料の中でも宮古関連のものがかなり多かったと思われる。そしてその資料の一部は天理大学附属図書館 (以下: 天理図書館) のネフスキー文庫で保管されるようになった¹。

さらに、この天理図書館の資料と、ネフスキーがソ連に持ち帰り、没後サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋学研究所で保管され、何らかの形で発表²もされている資料とでは重なっている項目も必ずあるだろうと思われていた。一方、いまだに発表されていない、日本でしか残っていないかもしれないという資料の存在も否めなかった。なぜなら、筆者はネフスキーの『宮古方言ノート』(ネフスキー2005) の翻刻にかかわる研究 (Jarosz 2015) を行っていた段階で2014年に天理図書館の未発表資料とすでに発表されている資料を比較したところ、前者には後者が含んでいない箇所、ノート、草案などがそれぞれありと確認できたためである。

そこでネフスキー文庫で保管されている資料の内容を確認するために、2019年4月に筆者は科研費助成金の援助を生かし、天理図書館のネフスキー文庫で再び調査を行った。調査の結果、ネフスキー1971にも、ネフスキー1998にも、Громковская 1996などにも掲載していない、未発表と思われる、宮古語による文章が予測通り数点発見できた。

¹ ネフスキーが日本で義理の父のもとに預けておいた資料の経緯が詳しく語られるのは加藤2011: 271-273 (柳田国男の回顧談) である。

² 「何らかの形で」とはここで、ネフスキー没後に第三者により整理され発行されたНевский 1978 (ネフスキー1998が日本語版) とГромковская 1996を指している。ペテルブルグの原文を複写にしたネフスキー2005もその中の1つに当てはめられよう。

本稿ではそのうちの1点を紹介する。それはI:nu panasi「エイについて」³という平良五箇方言による民話である。

本稿は次のような構造になっている。まず、未発表資料としてのI:nu panasiを紹介する(第2節)。その上、I:nu panasiの提供源(出典)および内容について説明しながら、類似性を持った他の宮古の地域の対応民話に関しても考察し、I:nu panasiとの詳細な比較を行う(第3節)。それに続き、I:nu panasiの文章自体を掲載し(第4節)、その形態論的な分析、グロス(逐語訳)および自由訳を提供する(第5節)。最後に、I:nu panasiの中に見られる確定条件・原因標識の接尾辞-(i)ba、直接目的語の-ja標識、さらに意味論、語彙論にかかわる宮古語的な特徴に関して一考察をする。第4節と第5節の内容は、1932年平良西里生まれ、平良下里在住の平良五箇方言母語話者、仲宗根浩二氏の協力・相談を得た結果である。

以下は、特筆しない限り、原文よりの引用は便宜上ネフスキーの独特な音声表記から現代音声記号に転写した物である。

なお、本稿で主要な言語情報提供者で、該当文章の適切な解釈や標準語訳の作成において不可欠な協力をくださった仲宗根浩二氏、および宮古民話に関する貴重なご指摘を提供してくださった佐渡山せい子氏に対する感謝の意を述べたい。同時に、本稿のあらゆる誤った点、不正確な点などは筆者の不勉強によるもので、もっぱら筆者の責任であると断っておきたい。

2. 本稿で取り上げる資料について

ネフスキー文庫所蔵の資料の中に、Folklore of the Miyakojima Islands: twenty-two folk songs or Ayago and three folktales (請求記号088/イ2/A45 <B.700>)という英文のタイトルの1件がある。タイトルの通り、その内容は宮古語による古謡・広い意味のアーグが22点、そして話し言葉的な「散文」の民話が3点、合わせて25点の口承文学の記録である。それぞれの項目は順番に1から25までの番号が付けてある。文章の形式はタイプライター打ちの簡略音声記号(ローマ字)である。数箇所例外を除けば解説も訳も付いていなく、宮古語による文のみとなっている。しかも、断片的なもの、未完成なものが多く、完了した作品の記録の方が少ないようである。

25点のうち、1. のNi:manušu:, 4. のPstujum'a a:gu(両方原文表記)などのように、Невский 1978(ネフスキー1998)なりネフスキー1971なり、すでにいずれかの発行物で発表された項目と内容が一致しているものが大多数を占めていると思われる。一方、全く未発表のものも見当る。特に23と25の民話に関してはそう言える。

³ 天理図書館翻刻番号1330。

本稿で取り上げることにした一点は番号23. Ji:nu panasĩ (原文表記) という民話である。これは21行からなる、ほぼ完成したと見られる民話の素原文である。ネフスキーによる解説や注釈が皆無ではあるが、文章の外見からその言葉は平良五箇方言であると推量できる。

3. I:nu panasiとは

ネフスキーが記録したI:nu panasiは記録の場所も、日付も不明である。ところが、歴史学者で宮古諸島における郷土研究先駆者の1人であった慶世村恒任はネフスキーと密接に協力し合い、ネフスキーによる宮古研究の最も重要な地元のインフォーマントであったことが知られている⁴。特に、ネフスキーの3つの宮古旅行のうちの第2回目の間に、すなわち1926年の夏に慶世村は『月のアカリヤザガマの話』(ネフスキー1971: 12-13) や『美人の生まれぬわけ』(日本語)(同、32-33) のような民話、『宮古島子供遊戯資料』(同、76-93) の論文で掲載されたいくつかの遊び歌など、数多くの口承文学の項目をネフスキーに伝えたと思われる。これをきっかけに、I:nu panasiの提供者も同じく慶世村だった可能性を検討できるようになる。話の流れという点からしても、話の提供者が聞き手のある場所について案内しながらその場所の由来やそれにかかわる伝えを紹介するという形式がI:nu panasiと『美人の生まれぬわけ』の共通点で、両者の語り手が同人物だった可能性をうかがわせる。

さらに、慶世村自身の著作、『宮古史伝』においてもI:nu panasiと内容の通ずる『龍宮の瑠璃壺』(標準語版)(慶世村1927: 20-22) といった民話が記録されている。『宮古史伝』の記録の方は分量が多く、内容の詳細においても多少相違点があるにもかかわらず、現在の管見に基づき、I:nu panasiの提供者を慶世村恒任であると仮説を立て、その記録の時期を1926年8月ごろに想定する。

ネフスキー採集のI:nu panasiの粗筋は、次のようにまとめられる。

昔々、漁師がいた。ある日、漁師は漁獲しようと海辺へ下りたところ、そこに大きなエイがいた。それを捕り、関係を持ってから、海へ戻した。それから10年以上がたち、また漁師は海へ下りると、見ず知らずの子供が彼のことを「お父さん」と呼んだ。そして「お母さんがお父さんを連れてくるように言っている」とも伝えた。その子供が漁師とあの時のエイとの関係から生まれたと漁師は分かった。それで漁師は子供に素晴らしい海底の国に案内してもらった。帰ろうと決めた時に、漁師は不老の神酒の入っている魔法の甕をもらい、「これを人に見せないで、毎日飲んでいってください」という戒めの

⁴ Jarosz 2015: 149, 本永2012: 72などを参照。

元で陸へ戻った。その時から漁師は魔法の甕から毎日神酒を飲んでおり、年を取らなくなった。ところが、自分の作ってあげたご飯より神酒ばかり飲んでいることを悔やんでいた妻が事情を怪しく思い、魔法の甕をひっくり返してしまった。すると甕から白い鳥が飛んで行き、大きい森（山）の上に止まった。その森の中に御嶽が設置され、そこに飛んできた白い鳥が祀られるようになった。

原文ではその御嶽の名前も所在地も述べられていない。しかし、慶世村版曰く、甕（慶世村版では「瑠璃壺」と具体的に呼ばれている）から現れて飛んで行った白い鳥は「宮国のシカプヤというところ」（慶世村1927：22）に飛んでたどり着き、あれから毎年8月・9月ごろに3日間にわたるシナプカ祭が行われるようになったという。なお、「シカプヤ」は現在「スカプヤ」、シナプカ祭は「シナフカ」と通称されているようである（比嘉2005：285参照）。

I:nu panasiと内容の似たような民話は、確認できた範囲では、城辺町の様々な民話集に数点記録されている。その中には、福田他1991収録の「エイ女房1」⁵（頁37－41）と「エイ女房2」（頁41－47）がある。両方とも城辺宮古語と標準語対訳という形式の掲載になっている。慶世村版と同様に、それらの内容はI:nu panasiより詳細な場面が描かれている、話の展開が微妙に異なるなど、それぞれに相違点がそれなりある。

福田他1991：40では、「エイ女房1」と内容の面で関連のある城辺町各地の類話がさらに6つ紹介されている。類話の粗筋は大まかに「エイ女房1」とそっくりである。ただし詳細にかかわるいくつかの相違点も存在しており、それらを以下の表1で指摘する。

一方、6つの話の中に、竜宮で漁師がもらうのは魔法壺ではなく金の山羊を産む山羊で、その金の山羊のおかげで漁師夫婦が金持ちになり、その結末に教訓、戒め、御嶽由来の話などが一切ないなど、後半は全く別話になっていると思えるほど同系の民話とは異なる物（類話2）もある。

一貫して言えば、全ての話の共通点としては以下の特徴が挙げられる。

- ・話の主人公は漁師である。
- ・漁師は海辺でエイを捕る。
- ・そのエイと性的な関係を持つ。
- ・歳月が経ってから、漁師とエイの関係から生まれた子供が海岸に現れ、「母が連れ

⁵ 民話の提供者（1909年生まれ、長中出身の下地進幸）と内容が一致していることから、その自由訳・書き言葉的な標準語版が収録されているのが城辺町史編集委員会1990：171－174の「シナフカの由来」と思われる。

てくるように言いました」といい、漁師を海底⁶の国に連れて行く。

- ・海底の国は立派で豊かな場所である。
- ・漁師が自分から「そろそろ帰ろう」と言い出すと、海底の国の宝物である魔法の甕（壺）を渡される。
- ・その甕（壺）の効果で、漁師は恵まれ、不足などない生活が送れるようになる。
- ・甕（壺）の存在が漁師の妻、もしくは村民にばれたら、甕（壺）から白い鳥が飛んで行き、甕（壺）が使えなくなる。
- ・白い鳥が止まった森に御嶽が設定され、祀られるようになる。

反対に、それぞれの話の主な相違点が以下の表1にまとめられている。

⁶ 慶世村1927と同様に、「エイ女房2」では、海底の国のことを具体的に「竜宮」もしくは「龍宮界」と呼んでいる。

表1 「エイ女房」系民話の比較

	I:nu panasi	慶世村1927
言語	平良・宮古語	標準語
文字	音声記号	漢字かな交じり
漁師の出身地	不明	荷川取北宗根
漁師の名前	不明	眞々佐利 (ママサリヤ)
関係を持った時の エイの姿	エイのまま	人間の女性に変身
漁師とエイとの初 会と海底の国への 案内との時間差	10年	2、3ヶ月
甕（壺）の中身と その効果	不老の神酒	不老不死の神酒 倉庫の穀物があふれてくるなど、裕福の授 受も 壺は瑠璃壺
甕（壺）の利用に 関する注意・条件	誰にも見せずに、一人で 神酒を飲む	特になし
白い鳥が出てくる 場面	漁師の妻は作ってあげた ご飯を漁師が食べてくれ ないことを怒り、甕を ひっくり返す。そこで甕 から白い鳥が飛んで行く	集落の人々が漁師の家の繁栄を不思議に思 い、壺に何が入っているか見せてもらおう と押し寄せてきたので、漁師は「珍しいも のではない、毎日同じ神酒ばかり出ていて もう飲み飽きた」とウソをつく。そこで壺 は白い鳥に変身し、東南へ飛んで行き、宮 国のシカプヤというところにある家の庭に 止まり姿を消した
話のくくり	鳥が不特定の森の上に止 まり、そこで御嶽が設置 され、祀られてきた	白い鳥が隠れた家の主が白い鳥を拝む祭を 行えと夢で神の仰せを受けた。実際にそう したら、シカプヤの住民が豊かになっていっ た。その出来事がンナプカ祭の由来である

	エイ女房 1	エイ女房 2
言語	城辺長中・宮古語	城辺長中・宮古語
文字	漢字かな交じり	漢字かな交じり
漁師の出身地	不明 狩俣（類話 2、5）； 宮国（類話 6）	荷川取
漁師の名前	不明 マサリヤ（類話 2）	不明
関係を持った時の エイの姿	エイのまま	人間の女性に変身
漁師とエイとの初 会と海底の国への 案内との時間差	5、6 年 不明・「何年後」（類話 1）； 不明・「ある日」（類話 6）； 2、3 年（類話 2）	2、3 年
甕（壺）の中身と その効果	思うままの底知れない糧 壺のことをイヌカミという（類話 6）	長寿・不老の酒 倉庫の穀物があふれてくるなど、 裕福の授受も
甕（壺）の利用に 関する注意・条件	妻を含めて誰にも見せずに、家にも 持って行かずに、外で隠して一人 で中身を飲む	特になし 中身は家族に分けても可
白い鳥が出てくる 場面	漁師の妻は漁師が家でご飯を食べ なくなったことを不思議に思い、 ひっそり漁師の後を付いて畑で壺 から何かを飲んでいる姿を目撃 し、後ろから近づいてきて声を出 して驚かせると、漁師は壺を落と し、壺から白い鳥が飛んで行く	集落の人々が漁師の家の繁栄を不 思議に思い、壺に何が入っている か見せろと粘り強く促していたの で、漁師は壺の中身を見せようと した。その途端、壺が白い鳥に変 身し、ある人の家の庭に止まり姿 を消した
話のくくり	白い鳥は宮国の森にある大きいガ ジュマルの木の枝の上に止まり、 そして地面に下りて、また壺に変 身する。そこで宮国集落の遥拝所 が設置され、祀られてきた 白い鳥が止まるのはウカンブヤーと いう木（類話 5）、御嶽名はウカブヤー（類 話 6）	白い鳥が隠れた家の主が神々の夢 を 2 回見、夢の中で言われた通り、 白い鳥が止まった木の下に御拝所 を作り祝いをし、それからその家 の人が繁盛していった。これがン ナフカ祭の由来である

さらに、この4つの話の中、I:nu panasiが最も短く、海底の国でもてなしの描写など、原文から抜けている部分もあると思われるので（第4節参照）、当然ながら、I:nu panasiにないような詳細な場面も他のバージョンではいくつか描かれている。

このように、この「エイの嫁入り系」というべき系統の民話には大きく分ければ2種類があると結論づけられよう。1つ目は甕（壺）に関する禁忌を守れなかった理由は漁師の妻が抱いていた嫉妬・憤慨なのに対し、2つ目では漁師が突然金持ちになったことに対する村民同士の懐疑や不信が話の結末の理由である。前者に属するのはI:nu panasiと「エイ女房1」で、慶世村1927や「エイ女房2」が後者の代表である。話の展開を比較しても、前者は漁師が海底の世界から委ねられた甕（壺）の秘密を守れなかった戒めである一方、後者はどちらかというとい異世界の宝物を独り占め（一家占め）にしようとしていた主人公の欲深さへの戒めであるように思える。両種類の民話は粗筋が似ていても、その最終的な教訓が根本的に違うように見える。

I:nu panasiの内容にかかわる独特の特徴に関して言えば、漁師とエイとの初対面から漁師の海底の国への案内まで10年も経った点がある。さらに、海底の国でもらった甕の効果は不老・長寿を授受する点だけで「エイ女房1」より「エイ女房2」の方と類似している。

4. 原文の音韻転写

天理図書館ネフスキー文庫収録のFolklore of the Miyakojima Islands…におけるI:nu panasiの原文を現代音声記号に変換し、その音韻転写を以下紹介する。

上述（第3節）のように、原文には多少欠落が生じているようで、そのため話が完成していないと思わせるような数箇所もある。ネフスキーが宮古で過ごせた時間がわずかで、しかも被調査主が話している間にその場で内容を書き留めるような形式で調査を行っていたので⁷、投稿の準備さえ明らかに整えていないI:nu panasiの場合には当然の結末かもしれない。これらの箇所を補うために、筆者の調査協力者である仲宗根氏が話の流れを潤滑にさせる最小限の宮古語を追加した。仲宗根氏による追加の箇所はカギ括弧 [] の中に入れてある。

⁷ このようなネフスキー調査の様子は国仲寛徒の回顧談に出ている（加藤2011参照）。

I:nu panasi

Nkja:ndu imɕa:nu atazsugadu, aru psi: im uriga ikibadu, upo:punu i:nu uriba [i:ju tuztazsuga, „nnuttsuba tasiki fi:ru”-ti: uriba], tuddza: ɕi:tti pirastaz.

Uikara tu:ti amaz nari, mata im uribadu jarabinu uti:

„Ha:i, uja! Annagadu tumo:ɕi: ku:-tinu munu jarja: ma:tski mmja:tɕi”-ti aɕuriba

„no:ɕinu ssain jarabigamanuga pstu: uja-ti: aɕi uzga?”-ti azzibadu, jarabja:

„tu:ti mainu kutu: ubuimi:samatɕi”-ti aɕu:riba, jo:jaku umuidaci, udurukstaz.

Imɕa:ja unu jarabigaman sa:rai imnu suku:nkai ikibadu, kagi:tɕanu ka:rajanu kja:ja tatɕinarabi

unu vtsinu dza: [nkai tu:saitti, mmamunu: fai, buduzza mi:, tanusumi utazsuga]

naga kagi ja:nkai kairaditi: azzibadu, imi:tɕa:nu kamigama: turaɕi,

„Nksi:du pazzuriba pstunna miɕidanaci: mainitsi nkigiribadu tussumai turadana itsigamimai baka:baka-ɕi: uz”-ti: nara:ɕi jarastaz.

Imɕa:ja ja:ju ɕei:, pataki skatsinamai ja:karanu aɕu:ba fa:dana ɕi-tti patakinu addzan kamigama: utskiuti: nkssa numi uribadu itsigamimai baka:bakaci: utazsugadu,

ja:nu tudzinu urja: kantsiki,

„no:ɕinu [ba:tiga] kamigamanu nkzu-tja:na⁸ numittiga бага mutasi munu fa:nga?”-ti ksmo: idi: kamigamo: kairaci:badu, nakakara ssutuznu idi: tubi:ki, upu muznu wa:bin tumataz [-ti:nu munu].

Uikaradu unu muzn utakja: tati matsiztaz-tsa.

転写に関する注意点をいくつか取り上げる。

イ. 単語の分かち書きが多くの場合原文のままである。ただし、付属語（接尾辞・クリティック）と共起するハイフン、または改行の様子、引用符のような句読点の使い方は筆者によるものである。

ロ. 原文は音韻転写というより、音声転写に近い部分も何箇所含めている。このため筆者の音韻転写で抜けているが、注目に値する点の例としては、題名の「エイ」がji:もしくはi:と渡り的な接近音をもって記されていること；確定条件・理由を表す接尾辞-(i)baの一部がikiva「行ったら」、ɲkigiriva「召し上れば」などのように、唇歯接近音ɸをもった発音が示されていること；up'o:p'u「大きい」のように、閉鎖音の有気発音が示されていること；tudza「妻は」、mm'a:ɕiti「いらっしゃいと」のよ

⁸ 原文nkzu-iana

うに、長音のみならず、長さが短音と長音の間に当たる半長音の記号・も使われていること；などが挙げられる⁹。

5. グロスと訳

1. Nkja:n-du imɕa:-nu a-taz=suga-du
昔-FOC 漁師-NOM ある-PST=けれども-FOC
昔々漁師がいたけれども
2. aru psi: im uri-ga ik-iba-du, upo:pu-nu i:-nu ur-iba
ある 日 海 下りる-PUR 行く-CSL-FOC 大きい大きい-GEN エイ-NOM いる-CSL
ある日（漁獲に）海に下りて来たら、（そこに）大きいエイがいたので
3. [i:-ju tuz-taz=suga, „nnutts-u-ba tasik-i fi:-ru”=ti: ur-iba
エイ-ACC 取る-PST=けれども 命-ACC-TOP 助ける-MED くれる-IMP=QUOT いる-CSL
（その）エイを捕ったけれども、「命を助けてください」（＝殺さないでください）と
（エイは）言っているのです]
4. tuddz-a: ɕi:-tti pir-as-taz
妻-TOP する-CON 行く-CAUS-PST
妻にしてから（自由に）行かせた。
5. Ui-kara tu:=ti amaz nar-i mata im ur-iba-du jarabi-nu u-ti:
それ-ABL 10=年 あまり なる-MED また 海 下りる-CSL-FOC 子供-NOM いる-CON
それから10年以上経ち、また（漁師が漁獲に）海に下りて来たら、（そこに）子供
がおり、
6. „Hai, ujal! Anna-ga-du tumo-o ɕ:-i k-u:=ti-nu munu jar-ja:
ねえ 父 母-NOM-FOC 伴-TOP する-MED くる-IMP=QUOT-GEN もの COP-CSL
「ねえ、お父さん。お母さんが連れて来いと言っているのです、

⁹ ネフスキーの音声表記法に関する詳細は、Jarosz 2015で考察されている。

7. ma:tski mmja:-tɕi"=ti aɕ-ur-iba
 一緒 いらっしゃる-IMP=QUOT する-PROG-CSL
 一緒にいらっしゃい」と言っているのです
8. „no:ɕinu ss-ai-n jarabi-gama-nu-ga
 どうして 知る-PSV-NEG 子供-DIM-NOM-WHFOC
 「どうして知らないお子さんが
9. pstu-u uja=ti: aɕ-i uz=ga?"=ti azz-iba-du
 人(自分)-ACC 父=QUOT する-MED PROG=INTR=QUOT 言う-CSL-FOC
 僕のことをお父さんと呼んでいるのか?」と言ったら、
10. jarabj-a: „tu:=ti mai-nu kutu-u ubui mi:-sama-tɕi"=ti aɕ-u:r-iba
 子供-TOP 10=年 前-GEN こと-ACC 覚える-MED CNT-HON-IMP=QUOT する-PROG-CSL
 子供は「10年前のことを思い出してみてください」と言っているのです
11. jo:jaku umuidaɕ-i uduruks-taz.
 ようやく 思い出す-MED 驚く-PST
 (漁師は) ようやく思い出して、驚いた。
12. Imɕa:-ja u-nu jarabi-gama-n sa:r-ai
 漁師-TOP それ-GEN 子供-DIM-DAT 連れる-PSV.MED
 漁師はそのお子さんに連れられ
13. im-nu suku:-nkai ik-iba-du
 海-GEN 底-DIR 行く-CSL-FOC
 海の底へ行ったら
14. kagi-itɕa-nu ka:raja-nu kja:-ja tatɕ-i narab-i
 美しい-DIM-NOM 瓦屋-GEN 群れ-TOP 立つ-MED 並ぶ-MED
 可愛い瓦屋の群れが立ち並び

15. U-nu vtsi-nu dza:[-nkai
 それ-GEN 奥-GEN 座敷-DIR
 その奥の座敷に
16. tu:s-ai-tti mma munu-u fa-i buduzz-a mi:
 通す-PSV-CON おいしい もの-ACC 食べる-MED 踊り-TOP 見る-MED
 案内され、おいしい食べ物を食べて、踊りを見て
17. tanusum-i u-taz=suga
 楽しむ-MED PROG-PST=けれど
 楽しんでいたけれども]
18. na-ga kagi ja:-nkai kair-adi=ti: azz-iba-du
 自分-GEN 立派 家-DIR 帰る-INT=QUOT 言う-CSL-FOC
 「立派な（可愛い、大切な）我が家に帰りたい」と言ったので
19. imi-itça:-nu kami-gama-a turaç-i
 小さい-DIM-GEN 甕-DIM-TOP くれる-MED
 （エイは）小さな小甕をくれて
20. „nksi:-du pazz-ur-iba pstu-nn-a miçi-dana ç-i:
 神酒-FOC 入る-PROG-CSL 人-DAT-TOP 見せる-NEG.CON する-CON
 「神酒が入っているから、人には見せないで
21. mainitsi nkigir-iba-du tuss-u-mai tur-adana
 毎日 召し上がる-CSL-FOC 年-ACC-INC 取る-NEG.CON
 毎日召しあがると年も取らずに
22. itsi-gami-mai baka:baka ç-i: uz”=ti: nara:ç-i jaras-taz
 いつ-LIM-INC 若い若い する-MED PROG.NPST=QUOT 教える-MED くれる-PST
 いつまでも若々しくいる」と教えてくれた。

23. Imɕa:ja ja:ju kɕ-i, pataki s-katsina-mai
 漁師-TOP 家-ACC 来る-MED 畑 する-SMT-INC
 漁師は家に来て、畑仕事をしながらも
24. ja:kara-nu aɕu-u-ba fa-adana ɕ-itti
 家-ABL-GEN 昼ご飯-ACC-TOP 食べる-NEG.CON する-CON
 家からの昼ご飯を食べずに
25. pataki-nu addza-n kami-gama-a utsk-i u-ti: nkss-a
 畑-GEN 傍ら-DAT 甕-DIM-TOP 置く-MED PROG-CON 神酒-TOP
 num-i ur-iba-du
 飲む-MED PROG-CSL-FOC
 畑の脇に小甕を置いていて神酒を飲んでいたので
26. itsi-gami-mai baka:baka ɕ-i: u-taz=suga-du
 いつ-LIM-INC 若い若い する-MED PROG-PST=けれども-FOC
 いつまでも若々しくいたけれども
27. ja:nu tudzi-nu urja-a kantsik-i
 家-GEN 妻-NOM それ-TOP 気づく-MED
 漁師の妻はそれに気づき
28. „no:ɕi-nu [ba:=ti-ga] kami-gama-nu nkzz-u=tɕa:na
 どうして-GEN [わけ=QUOT-WHFOC] 甕-DIM-GEN 神酒-ACC=ばかり
 num-itti-ga
 飲む-CON-WHFOC
 「どういうわけで小甕の神酒ばかり飲んで
29. ba-ga mut-asi munu fa-an=ga?”=ti ksmo-o idi:
 私-NOM 持つ-CAUS 食べ物 食べる-NEG=INTR=QUOT 肝-TOP 出る.MED
 私があげた食べ物を食べないのか」と怒って

30. kami-gamo-o kair-ac-iba-du

甕-DIM-ACC ひっくり返る-CAUS-CSL-FOC

小甕をひっくり返したら

31. naka-kara ssu tuz-nu idi: tub-i ik-i

中-ABL 白い 鳥-NOM 出る.MED 飛ぶ-MED 行く-MED

中から白い鳥が出て、飛んで行って

32. upu muz-nu wa:bi-n tuma-taz[=ti:-nu munu].

大きい 森-GEN 上辺-DAT 泊まる-PST[=QUOT-GEN もの]

大きい森の上に泊まった[とのこと]。

33. Ui-kara-du u-nu muz-n utakja-a tati matsiz-taz=tsa.

それ-ABL-FOC それ-GEN 森-DAT 御嶽-TOP 建てる.MED 祀る-PST=HRS

その時からその森に御嶽を立てて、祀ったという。

6. 解説

I:nu panasiで特に目立つ言語的な特徴といえば、理由標識である接尾辞-(i)ba、および直接目的語につく話題標識-jaの多発がある。

「理由標識」と名付けても、-(i)baの機能は理由を指示するに限らず、asuriba, azziba「と言ったら」のように確定条件や単純な時間関係・出来事の順序の色合いが強い場合もある。下地2008が伊良部方言にも同じような-(i)baの機能の幅を報告し、このように時間関係と因果関係を同じ接尾辞で標識するのは通言語学的にかなり一般的に見られる現象であるとも述べている（下地2008：546、下地2018：308－312）。

この標識は焦点標識-duと共起する場合も多い。このことから、-(i)baは新情報、ならびにやり取りの上で取り立てる必要性のある前景を差し出す従属節において使いやすいということが分かる。なお、表2から分かるように、-(i)baがI:nu panasiにおいて最も頻繁に共起するのは「行く」と「言う」の意味の動詞である。そのような動詞と-(i)baの組み合わせにより、出来事の時間的なつながりが標識もしくは協調され、それで話が展開させられると考えられる。

狩俣2007：42によると、宮古語保良方言では-(i)baが果たしている機能の中に、「原因、理由、条件、きっかけ」がある。「きっかけ」とは、ここでいう「単純な時間関係・出来事の順序」と一致している概念のようである。したがって、I:nu panasiにおける-(i)baの使い方と狩俣2007で報告されている保良方言における-(i)baの使い方の間には大した相違

点が見られない。

一方、I:nu panasiのような物を語る長い文章の場合に、単文より複文の方が圧倒的に多く、そしてその中に使われる節の種類は-(i)ba節の方が非常に頻繁に出ているという印象はおそらく談話分析の観点から興味深いことだろう。

I:nu panasiにおける-(i)baの用例とその機能の分布は表2においてまとめられている。

表2 I:nu panasiにおける-(i)baの用例

行目	用例	動詞の意味	機能
2	im uriga ikibadu	行く	順序
3	nnuttsuba tasiki fi:ru-ti: uriba	言う 逐語訳「いる」	理由
5	mata im uribadu	下りる 「海へ行く」という意味	順序
7	ma:tski mmja:tci-ti açuriba	言う 逐語訳「する」	理由
9	pstu: uja-ti: açi uzga?-ti azzibadu	言う	理由
10	ubuimi:samatçi-ti açu:riba	言う 逐語訳「する」	理由・きっかけ
13	imnu suku:nkai ikibadu	行く	順序
18	ja:nkai kairaditi: azzibadu	言う	理由
20	nksi:du pazzuriba	入る	理由
25	nkssa numi uribadu	飲む	理由
30	kamigamo: kairaçibadu	ひっくり返す	順序

宮古語、特に平良方言における直接目的語と話題標識-jaの共起に関する考察には、コロスコワ2007がある。さらに、伊良部方言に関しては、Shimoji 2016がある。同じ宮古語なので、平良方言と伊良部方言の間に多くの共通点が予測され得るものの、やはり名詞の曲用などの体系的な面で一致しない点も必ずあるだろう。このため、以下の考察は主にI:nu panasiのデータを対象方言が一致しているコロスコワ2007と比較しながら行うものにする。

コロスコワ2007によると、普通予測されている目的語（対格）標識-juと違い、話題標識-jaが選択されやすい目的語には次の特徴がある。

1. 中止節（付き添い文、もしくは合わせ文）に現れる。
2. 情報構文の上、旧情報・背景情報を表す傾向がある。
3. 他動性の比較的に低い述語の項である。

4. 個体化の度合いが低い。特に、非指示性、無生性といったパラメーターが³-jaとの接続を起こしやすいという。

I:nu panasiにおき、-jaが付いた直接目的語には次の8点ある。

tuddza: ci:tti 「妻¹⁰にして」(4行目)

tumo:ci: ku: 「伴して来いなさい」(6行目)

buduzza mi: 「踊りを見て」(16行目)

kamigama: turaçi 「小甕をあげて」(19行目)

kamigama: utskiuti: 「小甕を置いていて」(25行目)

nkssa numi uribadu 「神酒を飲んでいたので」(25行目)

urja: kantsiki 「それに気づき」(27行目)

utakja: tati 「御嶽を建てて」(33行目)

このように、上の8点は全て中止節に起こることが確認でき、確かにこれは-juより-jの標識を選択する場合の最も基本的な条件である、言い換えれば終止節の場合はおそらく他の条件が満たされていても-jが起こりにくい、と考えられる。

ただし、tuddza: ci:やtumo: ci:の類の形式はsi:「する」を補助動詞に使った名詞述語で、固定された句と思える。この種の名詞述語は典型的な動詞と同様にふるまい、主節(終止節)においても-j標識のままで登場することが予測されている。ところが、ネフスキー2005(Jarosz 2015)によれば、tumo:ci:の原型・いわば「辞書形」はtumo:siではなく、tumu-siのようで、I:nu panasiの場合もやはりtumu > tumo:といった-jの接続した上の変化が起きている。すなわち名詞述語とは言え、その名詞的な要素が情報構文の標識を取らないほど慣用性が高いというわけでもないようである。

従属節という条件さえ満たされている場合、mmamunu: fai, buduzza mi: 「おいしいものを食べて、踊りをみて」のように、直接目的語と-jの共起は-juとの共起と一見変わらな

¹⁰ 「性交する」の婉曲的な言い方。

い統合論上の環境に出場し、予測しにくくなる。ところが、mmamunu: fai, buduzza mi: の場合は、述語のfo:「食べる」と mi:z「見る」は他動性の度合いが異なると思われる。fo:は目的語に直接影響を与えその状態・あり方の変化をもたらす一方、mi:zは感覚動詞で、目的語はmi:zという行動の受け身というより行動にかかわる刺激に近い存在である。言い換えれば、fo:はmi:zよりもっと原型的な他動詞であると同時に、fo:の目的語もmi:zの目的語より原型的な目的語に近いと思われる。こうした点で、mmamunu: fai, buduzza mi: という部分は、「jaは他動性の比較的に低い述語の目的語に付きやすい」といったコロスコワ2007の観察を裏付けるような実例とも思われる。

同じく、urja: kantsikiの場合にも、kantsiks「気づく」は知覚動詞のため、その他動性も低く、目的語標識として-jaが出やすいであろう。このため、uri「それ」とは代名詞として有生階級において高い位置を占めている（Shimoji 2016: 232, 235も参照）にもかかわらず、述語の低い他動性がそれに優先し、目的語標識として-jaが選択されているかもしれない。実際にそうならば、これは目的語標識としての-jaの出場を可能にする条件にもある意味の階級性があることを示唆する。今後の課題にする値のある、類型論的な観点から興味深い現象だろうと思われる。

また、指示性・非指示性という基準の適応で説明できそうな用例も認められる。kamigama「小甕」が最初に登場する節kamigama: turaçi「小甕をあげて」と、不特定な御嶽の誕生をいうutakja: tati「御嶽を建てて」がそれであると思われる。kamigamaに関しては、後続のkamigamo: kairaçibadu「小甕をひっくり返して」（25行目）という節との比較からも明らかなように、文章の中での初登場のkamigamaは-ja標識、それに続くkamigamaは-ju標識を取ることで、特定・不特定の対立が文法化されていることを思わせる。このように、直接目的語に接続する-jaと-juの区別は少なくともこのような場面に英語などの冠詞のような機能を果たしているように見える。

一方、一見それらと矛盾している例も見られる。kamigamaはその2番目の出場ではkamigama: utskiuti:「小甕を置いておいて」と-ja標識を取ることで、その直後のnkssa numi uribadu「神酒を飲んでいたので」もnkss「神酒」が既出のもので特定のはずにもかかわらず、やはり-ja標識を取っているのである。この様子の原因を探ると、kamigama: utskiuti: nkssa numi uribaduという節の連鎖の目的語は背景情報で、その直後のitsigamimai baka:bakaçi: utazsugaduという焦点化された前景情報との区別を強調するように、背景情報である節の項はあたかも不定標識のような標識を受けていることも考えられる。

このように、コロスコワ2007が指示する直接目的語用の-jaが出やすい1-4の環境・要因は全てI:nu panasiで網羅されているようである。複数の要因が同時に働いており、情報性・他動性・有生性・指示性などの点でお互いに補助し合うような用例も認められる。こ

れは、例えばbuduzza mi:「踊りを見て」において中止節、動詞の低い他動性や目的語buduzの低い有生性および不定性、非個体化の組み合わせの類である。

ただし、逆に複数の要因が矛盾する場合、その間のどちら・どれが優先されるか、どれ・どちらが標識の最終的な決定につながるかは未詳である。

I:nu panasiで見られた範囲の傾向に限って言えば、次のようにまとめられる。

1. 直接目的語の-ja標識が出場するのは、中止節である。
2. 中止節の中でも、背景情報の節における項なら-ja標識が出やすい。
3. 背景情報でなくても、有生性の低い項なら-ja標識が出やすい。
4. 有生性の低い項でなくても、不定の項なら-ja標識が出やすい。
5. 不定の項でなくても、他動性の低い動詞なら-ja標識が出やすい。

以上の5つの傾向がどのような階層をなしているか、果たして階層として整理できるのか、といった問への回答を提供できるのは大量の談話・文章の分析の結果のみで、本稿はそのような試みに適しないとは言うまでもない。ただ、このように傾向だけを指摘することにとどまり、これで複数の要因の相互関係がある程度浮き彫りになり、今後の研究のために関連仮説がより簡単に立てられるようになると期待できる。

なお、Shimoji 2016が報告する-ja標識が述語の非完成相に依存するといった結論に関しては、明らかに完成相であるkamigama: turaciやutakja: tatiのような用例から分かるように、I:nu panasiのデータには当てはまらない。コロスコワ2007も動詞の相と-ja標識の関連性について触れておらず、どうもこの点では平良方言と伊良部方言がかなり異なるところと思われる。ただし、中止節の述語が非完成相の場合は情報構文の面でおそらく背景情報を表す傾向が強いだろうに、Shimoji 2016で完成相・非完成相の対立と解釈されている箇所も本稿で前景情報・背景情報の対立と捉えている箇所に通じる可能性がある¹¹。

最後に、平良方言の意味論および語彙論の面においてもI:nu panasiは考察の刺激をいくつか与えている。取り立てて述べる項目の中には、以下の数点がある。

¹¹ Shimoji 2016 : 232-233の次のような例文の対もこの解釈を支持すると思われる。
vvadu: uria narai: nauhudiga (-ja標識)「君たちはこれを習って何をする？」とvvadu: uriu narai:kara nauhudiga (-ju標識)「君たちはこれを習ってから何をする？」の対立では、前者では従属節が主節を修飾する節で、主節の出来事と切り離して解釈できなく、時間的にも同時に起こる一方で、後者では従属節と主節が順序に起こる、2つの独立した出来事の継起を表示する。これで前者の従属節は主節の前置き役を果たす背景情報、後者の従属節は主節と並ぶ前景情報と解釈できるだろう。
ukudzi:ja kaici: kammai tur (-ja標識)「大きい石を返したり、カニも取ったりする」とukudzi:ju kaici:karadu kammai tur (-ju標識)「大きい石を返してからカニも取る」の例文の対も同様に、-karaという順序を標識する接尾辞の挿入の有無により、従属節の情報性の高低、よって両節の独立性が決まり、従属節における直接目的語の標識が左右されるとも推量できよう。ここで、後者の従属節で-karaに続く焦点標識-duの出場も要注意。

イ。「漁師がいた」(1行目)のように、主語が人間名詞にもかかわらず、「存在する」意味を表す述語が期待通りの有生存在動詞uzではなく、無性存在動詞azである。ただし、実際に、宮古語のazはその標準語の同根語aruとは違い、有生名詞の主語の場合に「生きている」、「命がある」という意味も取る。

この点は、例えば、以下の諺を通して確認できる。

Az-su-nkai-du ko:ju-ba taks
 生きる-NMN-ALL-FOC 線香-ACC-TOP 焚く
 線香を焚くのは生きている人のためだ (Jarosz 2015 : 404)

Sin-su-ga mttts-a pstu=mtsi az-su-ga mttts-a mumu=mtsi
 死ぬ-NMN-GEN 道-TOP 1=道 生きる-NMN-GEN 道-TOP100=道
 死んだ人には道が一つ(しかなく)、生きている人には道が百本(もある)(新里
 2003 : 174¹²)
 「生きている」という意味のazは伊良部仲地方言の用例にも確認されている(富
 浜2013 : 7)。

ロ. ma:tski mmja:tci-ti ačuriba (7行目)、uja-ti: ači uzga (9行目)などのように、動詞asi「する」が「言う」という意味で使われ、その意味範囲の拡大が観察できる。このようなasiの使い方は伊良部諸方言にも確認されている(Shimoji 2008 : 584、富浜2013 : 18¹³)

ハ. 宮古語の独特な指小辞がI:nu panasiにおいても2種類が見られる。1つは「小さい、親愛、相手を侮る、などの意を表す」(下地1979 : 57) 名詞接尾辞の-gamaである。文章の中のjarabi-gama「お子ちゃん」はおそらく「愛称」の解釈で、kami-gama「小甕」は「小さい、小型」の解釈でよからう。2つ目は形容詞(形容語幹)接尾辞-itcaで、kagi-itca「かわいい」「きれいでかわいらしい」やimi-itca「ごく小さい、小さくてかわいい」(Jarosz 2015 : 346, ネフスキー2005 : 248)のような用例が見られる。

参考文献

- 新里博 2003。『宮古古諺音義 上代倭語の化石：宮古方言の手引き 付録宮古方言概説』。
 東京都：渋谷書言大学事務局。
- 加藤九祚 2011。『完本天の蛇：ニコライ・ネフスキーの生涯』。東京都：河出書房新社。
- かりまたしげひさ 1998。「宮古研究の先駆者—ニコライ・A・ネフスキー」。ネフスキー

¹² 音声表記は本稿の表記と統一させる上若干変更している。

¹³ 仲地方言の場合は「言う」ではなく「歌を歌う」の意味が記録されている。

- 1998にて。368-378頁。
- 狩俣繁久 2007。「宮古保良方言の条件形」。『南島文化』29。41-62頁。
- 慶世村恒任 1927。『宮古史傳』。平良市：南島史蹟保存会。
- 城辺町史編集委員会 1990。『城辺町史 第5巻 民話編』。城辺町：城野印刷所。
- コロスコワユリア 2007。「琉球語宮古方言の直接目的語の標識と他動性」。角田三枝、佐々木冠、塩谷亨編。『他動性の通言語的研究 Crosslinguistic studies in transitivity』。東京都：くろしお出版。282-294頁。
- 下地一秋 1979。『宮古群島語辞典』。那覇市：下地米子。
- 下地理則 2018。『南琉球宮古語伊良部島方言』。東京都：くろしお出版。
- 富浜定吉 2013。『宮古伊良部方言辞典』。那覇市：沖縄タイムス社。
- ネフスキー N. [ikolay] 1971。『月と不死』。岡正雄編東京都：平凡社。
- ネフスキーニコライ・A著 1998。『宮古のフォークロア』。リディア・グロムコフスカヤ編。狩俣繁久、渡久山由紀子、高江洲頼子、玉城政美、濱川真砂、支倉隆子共訳。東京都：砂子屋書房。
- ネフスキーニコライ・A 2005。『宮古方言ノート 複写本』上・下。平良市：沖縄県平良市教育委員会。
- 比嘉朝進 2005。『沖縄拝所巡り300』。那覇市：那覇出版社。
- 福田晃、岩瀬博、遠藤庄治、山下欣一 1991。『南島昔話叢書7 城辺町の昔話：沖縄県宮古郡城辺町 上』。京都市：同朋舎。
- 本永清 2012。「ネフスキーと宮古」。ネフスキー生誕120年記念シンポジウム実行委員会。『ネフスキー生誕120年記念シンポジウム報告書』。宮古島市：宮古島市文化協会。28-48頁。
- Громковская, Л[юдя] Л. 編1996. “Николай Невский. Переводы, исследования, материалы к биографии”. *Петербургское востоковедение/ St. Petersburg Journal of Oriental Studies* 8. 239-350頁.
- Jarosz, Aleksandra 2015. *Nikolay Nevskiy's Miyakoan Dictionary. Reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis*. 博士論文. Poznan: Adam Mickiewicz University Faculty of Modern Languages and Literatures.
- Shimoji, Michinori 2008. *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language*. 博士論文. Canberra: Australian National University.
- Shimoji, Michinori 2016. “Aspect and non-canonical object marking in the Irabu dialect of Ryukyuan”. In: Taro Kageyama, Wesley M. Jacobsen 編. *Transitivity and valency alternations: studies on Japanese and beyond*. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter. 215-245頁.

グロス略語

ABL	ablative	奪格
ACC	accusative	対格
ALL	allative	向格
CAUS	causative	使役
CNT	conative	試行相
CON	connective	接続
COP	copula	繫辞
CSL	causal	理由
DAT	dative	与格
DIM	diminutive	指小
DIR	directive	方格
FOC	focus	焦点
GEN	genitive	属格
HON	honorific	尊敬
HRS	hearsay	伝聞
IMP	imperative	命令
INC	inclusive	累加
INST	instrumental	具格
INT	intentional	意志
INTR	interrogative	疑問
LIM	limitative	限格
MED	medial	中止
NEG	negative	打消
NMN	nominalizer	名詞化
NOM	nominative	主格
NPST	non-past	非過去
PROG	progressive	継続相
PST	past	過去
PSV	passive	受身
PUR	purposive	目的
QUOT	quotative	引用
SMT	simultaneous	同時
TOP	topic	話題
WHFOC	WH-question focus	疑問視焦点